『 ご注文は？ 』

to-nakanata

『 ご注文は？ 』

企画：75°　　制作：遠名　奏　編集：75°

©遠名　奏

「えっと……、オーダーはあなたにお願いする。お金はあとで半分払うね。」

窓の外を見ていた彼女はトイレから帰ってきたぼくに気づくと、急にこちらに振

り返りながらそう言い残して席を立った。バックからポーチを取り出し立ち上がったので、きっとトイレに行くのだろう。ぼくは手を拭いたハンカチをポケットにしまいながら、腰を下ろした。

　上着を一枚着ると暑く、脱ぐと少し肌寒い日曜の昼過ぎ、ぼくらは近所にある喫茶店に来ている。今は外にあるテラス席も室内の席も適度に空いている。テラス席には高校生のカップルが仲良くおしゃべりを楽しんでいる。この喫茶店は旅行に関する雑誌や本が多く置いているため、旅行の計画をしにくるために利用する人が多い。ぼくと彼女もその例からにもれず、来週の連休に行く鎌倉の旅行の計画を立てるためにこの喫茶を訪れた。

　ぼくらは外がよく見える窓側の席に案内され、店員さんは簡単なメニューの説明のあと「良い旅行計画を」と喫茶店独自のあいさつとともに席を離れた。隣には中の良さそうな老夫婦が座っている。ぼくは席に荷物を置き彼女に一言かけトイレへと向かった。

さて、彼女は何が飲みたいのだろうか。

　てっきりぼくがトイレに行っている間にオーダーを決めていると思った。ぼくは同じものを二つ頼むつもりでいた。普段一緒に外食する時は、悩むことは多いが最後は彼女自身で決めている。今日はどうしたのだろう。少し様子がおかしい。体調や機嫌が悪い印象は半日一緒にいて受けていなかった。

――とにかく何をオーダーするか決めなければ――

　すごく難しい選択だ。もしかしたらこのオーダーによってさらに機嫌が悪くなるかもしれない。タイムリミットは彼女が帰ってくるまでほんの僅かなだ。それまでに注文を済ましておくこと。確か女子トイレには二人ほど並んでいたので時間にしたら五分ないだろう。

　彼女の機嫌が悪くなったと決まったわけではないが、このときぼくはすごく困惑していた。自動ドアが開き、子ども連れの夫婦と一緒に店内に風が入ってきた。

　この喫茶店にはコーヒーや紅茶など通常のメニューに加え、女性や学生に人気なキャラメル味や抹茶味マシュマロを使ったものなどスイーツにも似たメニューも用意されている。そしてサイズもこの店オリジナルで、小さい方から「リラックスして旅行計画を立てる、Rサイズ」、「みんなで楽しく旅行計画を立てる、Mサイズ」、「しっかりと旅行計画を立てる、Sサイズ」の三種類である。

　ぼくが初めて来たとき、ろくにメニューも見ずにSサイズを頼んで店員さんが持ってきてくれたドリンクを見たときはびっくりした思い出があった。

　いつもこの喫茶店で彼女がオーダーするものは、キャラメル味、抹茶味、それと期間限定の飲み物の三種類が基本だ。三つに絞ってもまだ三種類と三サイズで九

通りの選択肢が残っている。まだ決めることはできない。

「これは旅行の計画を立てるより、大変だ……」

　つぶやきながらもっと情報はないのかと、ぼくはテーブルの上を見回した。置いてあるのはメニューと鎌倉の散策マップの載った雑誌、それと手帳である。この中からではまだ欲しい情報は得られない。

　次に彼女のバックを見た。バックには海外で買ってきたタンブラーが入っているのが、隙間から見える。この喫茶店では自分専用のタンブラーを持ってくるとクッキーのサービスがもらえる。そのため互い一つずつお気に入りのタンブラーを持ってきてそれにドリンクを入れてもらい、楽しく飲んでいる。これで大きさはMサイズに決まった。このタンブラーにはMサイズまでしか入らないからだ。後は種類を選ぶだけ。残り三分の一になった。

　トイレの方から一人女性が出てきた。ぼくはちらりと横目で確認した。あと一人。考えるペースを上げなければならない。

　とりあえず期間限定のメニューを確認しよう。ぼくはメニューを手に取り開いた。はじめのページに目を向けると、ショコララテが載っている。おそらく期間限定のメニューだろう。去年も同じようなものだったな、そう思い出しながらぼくは自分のバックから彼女とお揃いのタンブラーを取り出しテーブルに置いた。

「あ…！」

　ぼくはタンブラーを見つめていた視線をメニューに戻した。そこには大小の違いよりも大きな違いがあった。

　しまった。選択肢にホットとアイスがある。今日の気候的にアイスもホットもどちらもありなだけに決めきれない。これで六分の一に戻ってしまった。隣の老夫婦のオーダーを受け、ドリンクの名前を伝える元気な声が聞こえる。テラス席から楽しそうな声が風に乗ってぼくに届く。時間がない……。

　種類さえ分かってしまえば、後は何とかなる。そう思ったぼくはまず種類から考えることにした。キャラメル味か抹茶味かショコラ味か。こないだは何を飲んだんだっけ。ぼくは思い出そうとしたが、思い出せない。思い出せないと言うことは、相当前のことになるのだろう。参考になりそうにもない。

　来週の連休に鎌倉に旅行に行くから抹茶味が飲みたいとかかなぁ。いや逆に鎌倉で抹茶を飲むから抹茶味以外か。こんな単純な考えでは絞ることはできない。

　このままではだめだ。後、考えるヒントになりそうなのはぼくがトイレに行っている二分ほどの間に何が起きたか、だ。それが分かればどうにかなる。彼女の言動から想像するしかない。疑問点はいくつかあるが、最大の疑問は、“なぜいつもは自分自身で注文を決める彼女がぼくに注文をまかせたのか”だ。

　これは私の好み知ってるよねと？、ぼくを試しているのか。いや、彼女はそんな態度を取ったことないし、少し恥ずかしがり屋なだけでそのような態度を取る性格ではない。

　残る原因としたら外的要因だ。たとえば注文を迷っている彼女を見かねて店員さんがわざわざ席まで来てくれて、苦手な飲み物をおすすめされて注文しづらくなったから、ぼくにまかせたと考えることができる。だが、仮にそうだったとしても、席を立つ前に一言キャラメル味がいいとか言ってくれるだろうなぁ。ぼくはメニューを持つ手にひんやりとした微かな風を感じてメニューから目を離すと、横を女性が通り過ぎるのが確認できた。トイレから女性が出てきたのだ。いよいよ時間が残されていない。ぼくは自分の呼吸が浅くなっているのを感じた。

　こんな直接的な外的要因ではなく、もっと間接的な外的要因だったりして……

　これで時間はもう残されていない。間接的な外的要因、たとえば隣席の老夫婦から聞こえてくる会話が原因だったり、カウンター席で勉強している女子大学生が飲んでいるちょっと強い香りのするチャイティーが原因だったり……

　聴覚的原因、嗅覚的な原因、どっちもありそうだけど、推測の域をでない。

――あぁ、もう分からない――

時間もない。腹をくくるしかない。ぼくは半分あきらめて注文をしに行こうとした。期間限定のショコラにしよう。キャラメル味と抹茶味はいつでも飲める。もし外れてしまっても今度また飲みにくれば問題ない。期間限定は逃すと一年間飲めなくなるので、今日飲んでおく。最善ではないが、最悪ではない選択をした。なんて弱腰な判断だ。自分が情けない存在に思う。

ぼくはテーブルの上にある自分のタンブラーを手に取り、彼女のバックから彼女のタンブラーを取り出そうとした。

「ん、ちょっとまてよ……」

そういえば何で彼女はタンブラーをテーブルに出さなかったのか？時間がなかったわけではない。ただ忘れていただけなのかな……もし意図的に出さなかったとしたらどんな理由があるのだろう。使いたくなかったからなのか…？

店員さんを呼ぶ前にもう一考しよう。そういえば彼女がトイレに行く前になんて言っていたっけ。確か注文は任せたと。その後は自分の分のお金は後で払うねと……いや、正確には半分払うだったはず。なんでこんな言い回しをしたのだろう。ぼくが同じのを頼むって分かっていたからそう言ったのかもしれない。

まだ考えていないことがある。それは視覚的な外的要因。ぼくがトイレから戻っ

てきたとき彼女は確か窓の外をみていたような。ぼくは窓の外を見た。そこにはテラス席に座っている高校生が仲――

　なんだ、そういうことだったのか。

　答えがわかったらなんだか笑えてきた。彼女のタンブラーを出すのをやめ、自分のタンブラーをカバンの中にしまい、店員さんを呼んだ。さっきまでのぼくと比べると自信に満ちあふれているだろう。ちょうど前の席の注文が終わったばかりで、すぐに注文できそうだ。店員のおねえさんが笑顔で席まで来てくれた。そしてぼくは気持ちのたかぶりをおさえながらこう注文した。

「おねえさんのオススメで。サイズは一番大きいSサイズを、一つ」

　いままで考えたことはほとんど意味がなかったのだ。味は何でも良かったのだ

ろう。注文を終えてドリンクがくるまでそう思い返していた。彼女はさすがにこう言うのは、恥ずかしかったのかな。

　ドリンクを注文したあと、ぼくは旅行雑誌をとりに本棚に向かった。彼女が席に戻ってきたのを確認し、雑誌を手にしながら（ぼくは）笑みが顔に出ないように押さえながら、彼女の席に向かった。

「こちらSサイズのアイスショコララテホイップクリーム乗せでございます。」

　店員さんはそう説明しながら彼女の前にドリンクを置いた。なんと店員さんが持ってきてくれたのはテラス席の高校生がオーダーしたものと同じものだった。彼女はびっくりして目を丸くしながらこちらを見上げる。ぼくは気づかないふりをしながら、雑誌に目を通す振りをしていた。

「なんで一つしか注文しなかったの？」

　わかっているくせにわざと聞いてきたのだろう。ぼくは、これから旅行の計画を立てるから飲み物が二つあったらテーブルがせまくなっちゃうからと答えた。

　本当は高校生カップルが一つの飲み物を仲良く飲んで楽しそうに話しているのを彼女がうらやましそうにみていたから、とは口が裂けても言えない。

　彼女はどんな顔をしているのだろう。気になるが顔を見てしまうとぼくも笑みを押さえ切れそうにないので、鎌倉の雑誌に目を向けながら、

「江ノ電に乗って大仏見に行く？それとも自転車借りて海沿いをサイクリングする？」そうぼくは無理矢理切り出した。

「紅葉も綺麗な時期だから、切通しの散策もしてみたいかも。」彼女は一口ショコララテを飲み、ドリンクとハンカチをぼくにわたしてきた。

　なぜハンカチもわたしてきたのかが分からない。とりあえずショコララテとハンカチ受け取ろうと手を伸ばしたとき自分の手が汗ばんでいることに気がついた。

　今度はぼくがびっくりし彼女の方を見てしまった。

「ありがと。」そっけないようにお礼を言いながらショコララテをもらい、わたしてきたハンカチでさりげなく手の汗を拭いきながら鎌倉の旅行計画に思考を戻し、

「それなら切通しの散策を中心に計画しよう」

　と計画を立て始めた。

　仲良く一つの飲み物を飲みながら。

　4416文字

『　ご注文は？　』

企画：75°　制作：遠名　奏　編集：75°

©遠名　奏

遠名　奏　http://tonakanata.jimdo.com/

75°　http://75do.populr.me/75